

ただただ、少年がドSお
嬢様に振り回されるお
話

雨が嫌い

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは魔術と神秘、幻想と謎が交錯する世界を描くミステリー作品……ではない。これはDSなお嬢様に拾われた哀れな少年がロードエルメロイ二世と一緒に振り回されるお話だ。

目次

その日、恐ろしい少女に出会った

1

世の中バカばかり

8

ロードに封じられた哀れな男

13

相談事は胃薬とともに

23

社交界の誘い

31

冠位の魔術師

40

嵐の前

51

その日、恐ろしい少女に出会った

あの日もこんな土砂降りの雨だった。

土砂降りの雨のロンドンを走って進む。後ろからは、命を狙ってくる魔術師の怒号が聞こえてくる。息は切れ、鼓動はうるさいほど高鳴り視界は揺れている。

電気魔術や炎や氷に変化させたチャクラムやナイフが俺を襲ってくる。紙一重でかわしながら、目くらましの魔弾を打ち返す。攻撃が直撃して、全身に痛みが走っても足だけは止めない。否、止めてはならない……。

耳鳴りが始まり、視界がかすんでくる。

「……いい加減あきらめてくれないかな？お前たちほど暇してないんだ」

壁際まで追い詰められ、絶望感に浸りながらも焦燥感を悟られてはならないと必死で、強気な姿勢をとる。

「悪いが、こちらとて暇じゃない。必要なのはお前の魔眼と魔術刻印だ。邪魔をするなら黙って死ね」

男5人に壁際まで追い詰められ、意識を保つのがやっとの子供が何とかして逃げ切り、安全な場所を確保する・・・これほどまでに完璧なクソゲーをどうにかしろってほうが間違っている。

「正直・・・痛いのは嫌なんだが・・・物理的な死つてのは怖くはない。だけど、納得のできない死を受け入れられるほど俺は大人じゃない」

「それが最後の言葉でいいか？」

「それに・・・俺を殺した奴が笑って生きてるのは我慢ならないな・・・俺がたとえ死んでもお前らには・・・苦しんでもらわないとな」

いつせいに、男たちは俺に飛び掛かる。身体強化をしているとはいえ、仮にも魔術師相手に不用心すぎる。おとなしく、遠距離から攻撃すればよかったものを。

乾いた音が、ロンドンに響いた。鮮血が咲き、雨音が一瞬消える。飛び掛かっていた男たちは一瞬、ひるみ距離をとった。ここまで追い詰められておいてなんだが、想定より簡単に俺を殺そうとした男の命を刈り取れたことに、一種の安堵を抱いた。普段から、俺のことを決して裏切らないとのたまっていたこの男は何の躊躇もなく俺を裏切った。これまでも、似たような裏切りはあったがまさかこの男にも裏切られるとは思わなかった。憤りはあった、悲しみはあった。信じていたものをこの手で殺したらもつとシヨックなんじゃないかと思つた。が、それよりも相手に対する落胆が上回ってしまった

た。まったく、所詮人間なんてこんなものかっつと。

「魔術師が拳銃に頼るなど恥を知れ!!!」

くだらない怒号は聞くに堪えない。驚くほど、頭が冷えていた。

「もういいや、お前ら」

銃弾を放つ。人数分の弾丸は誰一人にも届かなかつた。腐つても魔術師。ただでさえ、体に限界がきて狙いが定まらない子供の銃撃をかわせないほど落ちぶれてはいなかつた。だが、それでいい。

「そんなに見たいんなら見せてやるよ。『魔眼』つてやつを」

「まさかッ」

「虚構の魔眼か!?!」

「もう遅いけどな」

何人かは俺がなにをしようとしたのか気づいたらしいがもう遅い。

次の瞬間には、物言わぬ死体が四つ出来上がっていた。

「う・・・痛ッ・・・。くっそ」

目が痛む。頭が痛い。体が、悲鳴を上げている。まったくもつて厄日だ。権力闘争に明け暮れる魔術師など・・・俺を裏切る奴なんてみな死ねばいい・・・。

「ここから離れないとな．．．どうせすぐに追手が来る」

限界に近い体に活を入れながら、壁伝いに歩く。しばらくして、俺は意識を手放した。

目を覚ますとそこには少女がいた。器人形のような白い肌に純金の糸を思わせる細く真つ直ぐな髪、儂げな印象を吹き飛ばすような強い焰色の瞳を持った少女だ。

座るだけで優雅を纏っているが、何故だかすごく性格が歪んでいそうに見える。

「やあ、ごきげんよう。少年。気分はいかがかな？」

少女は、楽し気に俺の顔を覗き込む。一体瀕死の人間の何がそんなに面白いのだろうか。

「あなたは？」

「私かい？名前を聞くのならまず自分が名乗るべきじゃないのかな？淑女に先に名乗らせるなんて英国紳士としてどうなんだい？」

「．．．俺は「いやすまない。少しからかいたかっただけさ。君のことは知っている。アークライト・ファムルソーデ」

「知っている?」

「改めて名乗ろうか。私はライネス・エルメロイ・アーチゾルテ。なに、膨大な財産と人材、霊地と魔術礼装を他家や分家に奪われ、もはや『エルメロイ』という家名と天文学的な負債しか残っていない哀れな魔術師の一門・エルメロイ本家の次期当主さ」

「・・・日々命を狙われそんな肩書だな」

心の底からそう思う・・・だけど、これで俺のことを知っているのにも合点がいった。時計塔に存在する十二のロードの家系の一つ、エルメロイの次期当主。であるならば、ほとんど表に出てこなかった俺のことも資料か何かで把握していてもおかしくはない。

「初手から皮肉で返されるとは思ってたよ。それで? たまたま、私の家の前で倒れていた君を拾ってあげたわけだが? また、外に放り出してあげようか?」

体が動かない状態で外に出されたら、今度は逃げきれない。間違いなく死ぬ。実質、俺に選択肢はない。それに、現在進行形で死ぬほど体が痛いのだ。

「・・・何がお望みで?」

「僕が君を拾ったのは気まぐれだけど、治療したのには理由がある。なんだと思う? ワトソン君」

「俺の苦しむ姿が見たいとか?」

ライネスは面食らったように目を見開いた。

「・・・なんでそう思ったんだい？」

「だって、お前性格悪そうだもん」

かなり追い詰められたからだろうか・・・普段なら自分の本音をぶちまけるなんて真似はしなかったのだが、今回に限り、俺は取り繕うのをやめて、本音をぶちまけた。

「フッフ、傑作だ。こんな状況でそんなことが言えるなんてね。気に入ったよ。自殺願望でもあるのかい？」

「・・・」

「そんな君に残念なお知らせだ。君の予想は大当たりだ」

「痛ツツツ・・・」

突如として、ライネスの手が俺の傷口に触れた。あまりの痛みに、声が漏れる。ついでに涙があふれそうになる。

「思った通り、ついつい踏みつけたくなるほどいじらしい反応をする。ちようど、私を裏切れない従者^{玩具}が欲しくてね。そんな時に、君を見つけたんだ」

悪魔だと思った。なんて恐ろしい女だとも。だけど、自分を裏切らない存在を欲しが
る気持ちは痛いほど理解できた。心の底から信用できる人間に身をゆだねてみたいと
思う。・・・この少女に共感することは確かにできるが・・・それでもやっぱりこの少
女は

「この悪魔め・・・」

「これからはお嬢様と呼びたまえ」

ライネスは嗜虐的に、心底楽しそうに嗤った。

これが、俺『アークライト・ファムルソーデ』とエルメロイの姫『ライネス・エルメロイ・アーチゾルテ』の出会いだ。

世の中バカばかり

あの日、ライネスと自己強制証明セルフキヤーススコントロールを結んでから約一年。俺やライネスを狙ってくる刺客を蹴散らして、疲弊しているところにライネスからの無茶ぶりをされる日々。もうマジで、疲れた。他人の不幸が好きだと豪語するだけあって、その無茶ぶりは凄まじい。

「今日は、アビーロードの洋菓子店でダークシュガーのチョコレートを買ってきてきれたまえ」

「なあ、俺は昨日お前を呪い殺しに来た魔術師を徹夜で追っかけていたんだけど・・・」

「それがどうかしたのかい？」

「お前、従者を労わるとかいう考えはないのか？」

「下僕を労わる？何を言ってるんだ。疲労困憊で、目の下にクマを作ってなお、必死にもかく君の姿を見る絶好の機会を手放す方がどうかしている」

「お前の行き過ぎたサディスト気質の方がどうかしている!!!」

「アハハ、そうかい？君の弱った姿を見るのが癖になってしまつてね。想像しただけで、ぞくぞくするよ？そのいじらしい顔を踏みたい！ついでに泣き顔なんて見せてくれたら、たまらないよ」

嗜虐心むき出しの笑みを浮かべながら笑うライネス。

「・・・変態め・・・」

「可愛い下僕をからかいたくなるのは当然じゃないか。私をこんなにしたのは君なんだ。責任を取ってくれ」

ライネスは、ぞつとするほど妖艶な笑みを浮かべる。見るものが見れば、一瞬で恋に落ちてしまいかねないほど美しい笑みだ。まあ、残念ながら流石に俺はなれたのでそんなことはないが。

「ハア、分かったよ。行けばいいんだろ、行けば」

アピーロードでお菓子を買った帰り、殺気を感じ咄嗟に顔を逸らす。すぐ傍を炎の弾丸が突き抜けていた。

後ろを振り返ると、そこにはローブを被った男が迫っていた。

こちらが制止を掛ける暇もなく、男の足払いが決まる。体勢が崩れた俺の腹へと肘うちが迫った。

「っのっ!!」

身体強化をかけ寸でのところで躲し、男の体を蹴り飛ばし一気に距離をとる。

「・・・お前がライネス・エルメロイ・アーチゾルテの番犬か?」

「うわあ・・・なにそれ、その名前そんなに広まつてるのか」

だとしたら、心底嫌だ・・・なんて不名誉な。誰が、あの悪魔みたいな女の番犬なんぞに。

「ライネス・エルメロイ・アーチゾルテをだせ。そうすれば、お前は見逃してやる」

「ここ数か月で、よく聞くようになったセリフに思わずため息を吐きそうだ。俺を殺すのが、困難だとわかった瞬間俺を利用しようという腹なのだろう。

「それ、俺が飲むと思ってるのか?」

「逆に聞くが、何故お前はあの女をかばい立てする」

「さあね?」

「あのろくでもない女に仕える理由などないだろう。自己強制証明セルフギアス・スクロールの効力で裏切れないだけなのだとしたら、我々はお前を解放する用意が有る」

ろくでもない・・・まあ、あながち間違ってはいない。だが、ライネスを悪く言うのは・・・いや、他人がライネスを悪く言うのは気に食わない。歪みきつたあの性格は幼い頃からエルメロイ家の内紛や協会の権謀術数の渦中にあつて自分を守るための鎧だ。そんな境遇故に友人なんてあいつにはいない。本人はむしろ幼少期の権謀術数渦巻く

環境を愉しんでいたと言っているが、それは嘘ではないにしてもただの強がりだ。あいつはどこまでも純粹で、聡明だ。孤独が嫌いで、甘いものが好きな普通の少女だ。この一年で、それを分かってしまったが故に腹立たしい。何も知らないバカが、ライネスを侮辱するのは。まあ、本人には絶対に言わないが。

「ハハハ、見当違いもいいとこだな。俺がライネスの味方をしているのは．．．お前らみたいなバカが嫌いだからだよ。」

「そうか、己の立場も分からぬとは．．．やはりガキだな。死ぬね！」

いつも通り拳銃を抜こうとして、違和感を覚えた。サーーつと血の気が引いていく。「探し物はこれか？」

男が腕を上げるとそこには俺の愛用の拳銃が握られていた。ニタニタと嫌らしい笑みを浮かべているバカが視界に入り実に不快な気分に襲われる。

「フン、魔術師の面汚し目が。このようなものに頼るなど」

「．．．そのセリフは聞き飽きたよ。それに自分の勝利を過信し隙だらけのバカも見飽きた」

「何？」

「俺の戦い方を調べているくせに、肝心な部分は何も調べてないんだな。まあ、一介の魔術師程度じゃこの眼については調べることにはできないはずだけだよ」

「何を言ってる……」

「拳銃を奪われた。その現実を虚構嘘で上書きする。」

そう唱えた次の瞬間には、俺の手には拳銃が収まっていた。それと反転するかの如く、男の手からは拳銃が跡形もなく消え去っていた。

「な、何が……」

驚愕する男。

そのすきを見逃すほど俺は優しくない。撃鉄を起こし、引き金を絞る。乾いた音とともに発砲される弾丸。

しかし、腐っても魔術師。そんなものに、当たるほど間抜けでもない。

「まあ、無駄なんだけど」

弾は初めから男を射貫いていたかの如く、男の体を捉えた。

「バ、バカな!? 確かに躲かしたはず……」

「これなら、昨日の呪術師の方がよっぽど手ごわかったよ」

「ま、待て!?!」

「安心してくれ、殺しはしないよ。大切な情報源だ。『ガンド』」

俺は速やかに男の意識を刈り取った。

ロードに封じられた哀れな男

必要な処理をして、帰路に就く。家に帰ると、使用人が出迎える。使用人を軽くないな、自分の部屋に向かう。この家において、使用人はほとんど役目を果たせていない。ライネスは必要以上に使用人を自分に近づけないし、食事でも俺が毒見をするか、俺が作ったものしか口にしない。次期当主として、警戒心があるのは良いことだが、その分のしわ寄せが俺に来ているのは勘弁してほしい。

「ただいま」

「やあ、アークお帰り。随分と遅かったじゃないか、何かあったのかい？」

自分の部屋に帰ると相変わらずライネスが居座っていた。木製の机には、紅茶のポットがそしてミルクに砂糖が並べられている。皿の上には鮮やかな色の菓子が並べられている。マカロンを置いてある当たり、こういう趣味はライネスと合うと思う。

「いや、特に何も。アビーロードのビターチョコレート・・・これで問題ないか？」

「うん、気になっていたんだ。最近の新作でね。欲しいとは思っていたんだけど、タイミングがなくてね。助かったよ」

ライネスは、いつもの邪悪な笑みではない、純粋なえみを浮かべ上機嫌に足をプラップ

ラさせている。ティータイムの時のみ、ライネスの壊滅的な性格の悪さは一端、鳴りを潜める。

俺もライネスも甘いものが大好きだ……っというかお茶の時間が好きなのだ。ライネスは、決まってティータイムは俺の部屋に来て紅茶を飲む。何故だかは分からないが、おそらく、安全な場所だからだろう。俺の部屋もライネスの部屋も魔術的防御はしてあるが、結局のところ俺といたほうが確かに安全なのだ。もしくは、俺を自分の部屋に入れてたくないのか……。

「今日は何を飲む？」

「そうだね、今日はアールグレイにしよう」

「了解」

茶葉の入ったポットにお湯を注ぐ。一、二分たつと、ゆっくりと葉が開いて香りが立ち始める。

「ミルクは必要ないよな」

「そうだね、もし君がミルクを入れようものならバツとして一週間は女装して時計塔に行ってもらうつもりだったよ」

凄まじく恐ろしいことを言い出したライネスを、無視しコップに紅茶を入れる。

「……さて、じゃあ、戴こうか」

俺とライネスは、コップに口をつける。

「今回のアールグレイは、ダージリンのファーストフラッシュをベースにベルガモットの香りづけをしているのか」

「ご名答、アークの舌もだいぶ肥えてきたようだね」

「まあな」

続いて、お皿の上のお菓子にも手を伸ばす。見た目の鮮やかなマーブル模様のチョコは、ミルクチョコとホワイトチョコのまるやかなハーモニーが幸福感を呼び起こす。

しばらく、幸福感に浸っているとライネスがある人物の名前を出した。

「ウエイバー・ベルベットを知っているかい？」

「最近、ライネスが気に入っている第四次聖杯戦争から生還した男。かつてのケイネス・エルメロイの教え子だっけ？」

参加者の中で最も未熟と言われていた彼が生き残ったのだから、当時は話題になったものだ。

「ああ、我が義兄の死後に零落し見捨てられていたエルメロイ教室を受け継ぎ、三級講師になったのさ。一般的な時計塔の講師がせいぜい見込みのある生徒を助手に引きこもるとする程度で真面目に授業を行わない中で、彼の異様に分かりやすく実践的な授業は時計塔で居場所のなかった新世代たちの間でたちまち話題となり、あげく権力争いに敗

れた講師たちを何人も説得して登壇させ、これまでになかった多角的な教育体制を実現させて見せた」

「随分調べているんだな。まあ、確かに一種の天才だとは思うが」

「天才・・・天才か。確かに驚くことにその後、他の講師たちに失点や弱みを一つも見せず奇跡的に教室を三年間存続させているのだから、一種の才能だと言えるだろうね。実に面白いと思わないか？」

「で？その彼がどうかしたのか？」

「私の持つなけなしの権力を総動員して、拉致してこようと思つてね」

「ブツ・・・」

紅茶を噴出さなかった俺を誰か褒めてほしい。一体どんな起承転結があつて、そんな結論に至ったのかゆっくり聞きたいところだが、きつとそれに意味はないのだろう。この女が、結論を変えるなんて、滅多にない。

「そろそろ、運ばれてくるころだ。私は、私室に戻るとするよ」

俺はライネスの私室で這いつくばった彼・・・ウェイバー・ベルベットに同情の視線を向ける。

ライネスは、足の長い椅子に座り彼を見下ろしている。その後ろで俺は控えて立っている。彼をここに連れてきた、男たちは下がらせた。つまりこの空間には、俺とライネスと彼だけだ。

「帰国してからの君の活躍は知っている日夜胸躍らせながら拝見させてもらっていた。実は私は君の隠れファンというやつでね」

「・・・」

「私はライネス・エルメロイ・アーチゾルテ。私の後ろにいるのは、従者のアークライト・ファムルソーデだ。よろしく、ウェイバー・ベルベット君」

おそらく死でも覚悟していたんではないだろうか。ライネスの立場からすれば彼もまたエルメロイの利権を奪った盗賊に過ぎない。名門の中の名門だったエルメロイ教室の名を貶め、新世代を中心に低俗な現代魔術を講義しているなど聞くものが聞けば、死んでも償いきれない大罪である。だが彼は最初こそ戸惑っていたものの、ライネスの名を聞いた瞬間稲妻に打たれたみたいに立ちすくみ、申し訳なさそうに頭を垂れた。確

かに意外だったが一番面白かったのは、ライネスの表情だ。彼女のあつげにとられた顔など久しぶりに見た。彼には実に拍手をしてあげたい。

彼は覚悟を決めたような表情で言い放った。

「ロードエルメロイの件には僕にも責任がある」

ライネスが笑いをこらえるように唇をかみしめ

「へえ、どうして一体どんな責任かな」

と問いかけた。

彼は視線を落とし唇を噛んで肩を震わせていたが覚悟を決めたように視線を上げた。

「あなたの義兄であるロード・エルメロイ・僕（僕）の師でもあるケイネス・エルメロイ・アーチボルトを死に追いやったのは僕の愚かな暴走によるものだからだ」

「うんうん君が敵対しなければ我が義兄と婚約者ももう少し長生きできたかもね」

1年という短い付き合いだが、ライネスが嘘をついているのはよくわかった。都合が良いから相槌を打っているだけできっと彼女はちっとも賛同していない。

話を聞きかじっただけだが、俺から見ても、ケイネスエルメロイアーチボルトは、あの戦争で勝手に死んでいただろう。

彼は優秀な魔術師あっても戦闘のプロではないのだ。つまるところ参加してしまつた段階で、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは詰んでいた。まあ言い方は悪いが死

ぬべくして死んだのだ。魔術師ならばしば起こり得る程度の悲劇だ。俺から見ても大した責任は彼にはない。しかし彼は呻くようにして口を開いた・

「僕の罪は認めるだから命だけは勘弁してほしい」

「おや、そこは気が済まないなら殺してくれとでも言うところじゃないのかい？ 確か君が儀式を行つてきた極東は腹切とか得意な土地柄なんだろう。ここで命乞いはちよつとばかり情けなくなかないかい？」

「やるべきことがあるからだ」

あまりにきつぱり言うものだから、流石の俺も少し驚いた。一体どのような教育を受ければこのように育つのだろうか。資料を見た限り時計塔を出版する前の彼は、とにかく偏屈で自分の未熟さも顧みないろくでなしだったと書かれていた。しかし今の彼とはほとんど別人のようだ。自分と向き合うのは相応の覚悟と強さが必要だ。

ライネスは驚いた頭を切り替える為にこほん咳払いをした。

「ではせっかくだし私からいくつか要求してみようか」

と肝心なところを口にしてみる。ライネスの私室に彼が唾を飲み込む音が響き、彼女がうつとりと微笑みながら言葉を続けた・・・

「今エルメロイ派の借金は大変なことになっていてね。私が次期当主に選ばれた段階でアーチゾルだけが負担することになったんだがこれが利息を払うのも難しい。責任を

取るというのならまずはこの借金からどうかしてほしい」

普通に考えればこの段階で不可能だ。個人の魔術師がどうにかするには失われた資産は大きすぎる。仮にも時計塔を支えてきた12の名家である。現代の額に換算すればそれこそハリウッドの映画ぐらいは作れるだろう。しかし俺らの予想を越えて、彼はお人好しだった。

「分かった可能な限り対処する」

そう言つてのけたのだ。お人好しという表現は彼に失礼かもしれない。これは覚悟を済ませていると言うべきだろう……

今にも泣き出しそうに唇をへの字にしたままライネスを見つめる彼の顔は、実に同情したくなるがライネスからすれば、ついつい踏みつけてしまいたくなる顔なのだろう。

続いてライネスは、破壊されきった源流刻印をなんとか修復することを約束させた。この段階ですすがに俺も、頭が湧いているんじゃないかと疑ってしまった。きつとライネスも同じことを考えていただろう。

「では一番大事なところに行こう……残ったエルメロイ派は何かロードの地位だけは守り抜くと懸命だね。先ほど説明したように幅との意見が一致している候補は私なんだがなにぶん若すぎるだろうどうか私が適齢期になるまでエルメロイのロードの席を

維持してもらえないかな？」

「それは構わないが具体的にどうすれば？」

「分かりやすく言うとな私が成人するまで誰かにロードの仕事をしてもらうということだよ」

「ここで初めて彼は目を見張った。他の要求は覚悟していたがここで初めて彼の想定を超えてしまったのだらう。」

流石の俺もドン引きだった。

「お嬢様、いくら何でもそれはやりすぎでは？」

「黙っていたまえ、アーク」

思わず、口を挟んだが跳ね除けられた。

「待ってくれそれはつまり・・・」

「そういうことだよ。他のロードどもとのくだらない関係の維持は心底つまらないと思うが頼んだぞロードエルメロイ二世。それともこう呼ぼうが親愛なるお兄様、と」

「ここまで無茶の要求をしておいて最後にこう締めくくった。」

「そうだ四つ目の要求も加えておこう私の家庭教師になること。うん、血のつながらない兄に指導を受けるといっのは倒錯していて実にいい」

あの悪魔は笑ってとどめを刺した。このなんとも出来た瞬間を見ていた俺の感想

が一つ。

ライネスの無茶ぶりが分散されて良かったということだけである。後は、ライネスにいじめられる彼を見て少し、親近感を抱いてしまったのは内緒だ。

相談事は胃薬とともに

現代魔術科の町スラーはどこかツギハギめいた街だ。西にはそれなりに歴史の経た町並みが広がっているが、ロンドンに近い東にはやたらと近代的な建物が顔を覗かせている統一感がないというよりは大手術を行った後、傷口を覆い隠しているような風景だ。

なぜこんなことになったかといえればまあつまり金がないからである。魔術協会・現代魔術科がこのあたりの通りを買い上げた時、周囲を立て直さなくて良いのかと確かに打診されたらしい。というのも周辺環境は大いに魔術と関係するからであって買うならば古式の建築物で統一するのが望ましいのだが、いかんせん現代魔術科には金がかつた。そもそもこの辺りの土地を買い上げて以前から借金があるのだ・・・

悲しいことに世界の全てとは言わないが7割ぐらいは予算によつて決定される。それは魔術の世界においてすら変わらない。悲しきかなそもそも世界の価値を数字に換算しようという金銭の概念が神秘的なのだから仕方あるまい。

常に、インフレーションし続ける地球上の資産は、それ自体が合的無意識の作り出す神秘である。実際、金銭にまつわる魔術は洋の東西を問わず一定の需要があるらしい。

鳶の絡まるレンガの塀を曲がって坂道から十字路を直進、遅からず、目的の建築物が見えてくる。

時計塔十二科中、本部としては最も小さな学術棟であった。周囲にはとある大学の附属施設という名目になっていたちなみに第一科——全体基礎の学術棟は大学そのものを偽装しているのだが、現代魔術科の規模ではその言い訳は難しい。

玄関ホールに足を踏み入れるとひんやりした空気が俺を出迎えた。せめてここだけはつとノーリッチ卿からの融資の重点的にかけて玄関ホールだけにそれなりの落ち着きと品位を保っている。

が、わずか数十秒でその品位は破られた。

ヤツホーという掛け声とともにホールの螺旋階段の手すりを座る人影が滑り落ちてきたのである。短い金髪に青色の瞳、あまりにも楽しそうな笑顔であったがちょうど同じ螺旋階段へ足をかけようとしていた俺を見てその表情が反転した。

「うわわわわわーアークくん!？」

急制動も虚しくつるつと尻から滑って少年が加速する。ジェットコースターかという勢いで、滑落する金髪の少年が涙目で訴えた。床に激突する寸前、少年が FLOW と一小節を口にした。おそらく慣性制御などの魔術だろう。何かの護符も併用して

いるのだろうかよくもまあ落下しながら使えるものだと感じる。

元来、魔術には極度の集中を必要とする理由で、よほどの高位の魔術師であっても同じことができるかと言うと首を振るだろう。

『天才バカ』とも『天恵の忌み子』とも呼ばれる少年の瞳を見つめ少しばかり嫉妬に駆られた。本当にその才能が・・・羨ましい。

「フラット・エスカルドス、階段の手すりを滑りたくなる気持ちは分からなくはないが先生がすぐに見つかったら大目玉だぞ」

「流ツツ石、アーク君!!!分かってるくそこに螺旋階段があるなら滑らなきや失礼だよね?こんなにも綺麗に磨かれた手すりが俺のことを待ってるんだからそれはもうふらふらと行くのがマナーです」

凄まじい程の超絶理論を振りかざすがこの少年的には何も間違っていないのだろう。

「その言い訳もこれで30回目だぞ」

フラット螺旋階段の上から咎めるような鋭い声がかかった。

フラットが滑り降りた手すりに頬を寄せていたのは目の覚めるような美形だった。

スンつと、手すりのそばで鼻を鳴らす。

「相変わらずのむやみにピカピカ光つてとらえどころのない匂いだ真つ先に教室を出て行ったかと思えばまたこれか」

年齢はフラットと呼ばれた少年と同じく14歳ぐらい。ふわりとカールした金髪は昼下がりの陽光を受けて飴細工のごとく見えた。物憂げに伏せられた瞳の色は緑と群青の間でゆらめきてあつている。ほっそりとした指先から鎖骨までのバランス、そしてギリシヤの石像ならばかくあらんと想起してしまうほど奇跡的なまでの造形……思わず舌打ちしたくなるようなその美少年が刺々しい語り口で話しかけてきたのだ。

「エルメロイ先生に何度怒られて宿題を3倍にされた!？」

「え? だって宿題を増やすのは先生なりの励ましでしょう? ル・シアンくんだって先生にレポート増やされたら嬉しそうにしてるでしょ?」

「人をル・シアンとか言うな! スヴァインだ! スヴァイン・グラツシュエート! 何年経ったらそのスカスカの頭に入る!？」

眦を釣り上げビシツと人差し指を突きつける。その人差し指からゾクツとこちらの首筋を冷やす何かが、照射された。ガンドと呼ばれる北欧の魔術は指差しただけで人を病に陥れると言うが、こちらは獣の如き獐猛な殺意という凝縮したものだ。濃縮された殺意はそれ自体が呪いに等しい。これは例えば東洋で使われる蟲毒などの事例をあげれば分かるだろう。あ、念のため付け加えておくとこれは魔術でない……彼にとつては生態だ。

「だって、ル・シアン君はル・シアン君だよ!」

直撃しているはずのフラットは呑気にも気づいていない。生まれもつての強靱な魔術回路が半端な呪いを弾き返してしまうのだ。全くもって羨ましいことである・・・俺はため息をついて話しかける・・・

「お前らいつまでそうしているつもりだ？」

思ったよりも低い声が出た。

「す、すまない。アークライト君に、失礼なことをするつもりはなかったんだ」

「まあ別に失礼だと思っただけよ面白い見世物だった」

ウエイバー・ベルベットが、ロードに封じられてからそここの時間が経った。彼は、相も変わらず時計塔で授業をしている。特筆して、変わったことといえば、ライネスからの無茶ぶりで胃が壊滅的な被害をこうむり、大変なことになっていることぐらいだ。

「アーク君、今日は一人なんだね。ライネスちゃんはず？」

ああ、後はライネスの護衛としてトリムマウというゴーレムが、ロード・エルメロイⅡ世のアドバイザーが加わってできたことだろう。月霊髓液にライネスが擬似的な人格付与と機能限定を施しメイドゴーレムとした。

おかげで、俺は比較的自由になった。常に、ライネスのそばにいる必要もなくなったし・・・ライネスの家事全般をやることもなくなった。まあ、それでもなるべく私の傍に居ると言われるが。

トリムマウは万能ではない。主人であるライネスに忠実で、簡単な会話と家事雑役を行える程度の思考力を持つが・・・最近フラットに要らん知識を吹き込まれて彼と一緒に映画鑑賞に出かけるなど高度な魔術礼装とは思えない突飛な行動を取る。

「今日は私用でな。先生はいるか？」

「たぶん先生なら、私室にいると思う。匂いがするし」

「了解・・・それじゃあな」

そう言つて、俺はロード・エルメロイ二世の私室へと足を運んだ。

「やあ、先生」

「ノックをせずに入ってくるな。アークライト」

扉を開くと整った部屋が広がった。

やはり最初に目につくのは隙間なく置かれた本棚だろう。几帳面なぐらいにジャンルとサイズとで区別され、かつ日差しに焼かれないよう窓からの角度も配慮されている。・・・スライド式の本棚にはぎっくりと2000冊ほどの蔵書があるはずだが、もちろんコレクションのごく一部である。机に置かれた純銀軸の万年筆やギロチン式の

シガーカッターも実に洒落ている。ここだけ切り取れば、めちやめちや仕事のできる男の仕事部屋と言つても遜色はない。

「アークでいいよ。先生」

「・・・アーク、何の用だ？」

「用がなければ、来てはいけないのかな？先生」

彼は、眉間に深い皺を寄せ右手で額を押さえた。

「それにしても、最近は特に体調が悪そうだ。ちゃんと胃薬は飲んでる？」

「・・・最近君がくれた胃薬が底をつきかけているよ」

俺の愛用していた胃薬、瓶一本を三週間前に挙げた筈なんだけど・・・どんなペースで飲んでるんだよ。ほんとに、胃が破壊されるんじゃないだろうか。

「ハハハハ、そうですか。じゃあ、また今度持つてくるよ。ライネスの無茶ぶりを一緒に受ける仲間だからね」

「うれしくない仲間だ」

「先生のおかげで、俺に対する無茶ぶりも減つて助かつてるよ。この調子で、スケープゴートされてくれ！」

「お前ら主従は私の胃を破壊して何が楽しいんだ！」

「失礼な！俺は、別に先生の胃を破壊するつもりなんてない!!!ただスケープゴートされ

「て欲しいんだ!!」

「結果、私の胃が破壊されつくしているだろうが!」

「まあ、冗談は置いて言いて・・・」

まあ、冗談というわけでもないんだが・・・。

「本当に冗談なんだろうな・・・」

「ロード・エルメロイⅡ世のコネクションを使いたいんだ」

「・・・詳しく聞こう」

社交界の誘い

「それで？私のコネクションを使いたいという話だが」

「ああ、今使っている目薬では抑えきれなくなてな。腕のいい薬師を紹介してほしい」

俺がそういうと、先生は合点がいったように顔を上げた。

「・・・なるほど、確かに君の眼はいろいろな意味で特殊だ。ランクが『宝石』である時点で、実在を疑われるほどの代物だ。一歩間違えば、封印指定になりかねない」

「二応、『宝石』じゃなくて『黄金』ってことにしてるんだけどな。この眼には世話になっているが、厄介な代物でもある。最近じゃ、使用した後はしばらく動けないんだ」

「なるほど、確かにこのまま放置するのは危険だな。だが、生憎それほどの腕を持つものに心当たりがない。手は尽くしてみるのが、期待しないでくれ」

「・・・ああそれで構わない。助かるよ」

お礼を言つて、部屋から出ていこうと扉を開けると灰色のフードを被った少女がそこに佇んでいた。灰色のフードを目深にかぶって顔を隠しているだけでも特徴的だが、銀色の髪は、時計塔でも珍しい色だ。少女が、すぐに先生の内弟子であるグレイだと察した。

「久しぶりだな、グレイ」

「久しぶりです、アークライトさん」

小柄な体をますます縮めるようにして、恐る恐る挨拶を返すグレイについて苦笑してしまつた。

「相変わらず他人行儀だな。アークでいいと言っているのに」

「す、すみません。拙は……」

「別にいいさ、無理する必要性はない。心からでなく表面上だけでも他人を受け入れることは、何よりも難しいことだからね」

「グレイ、帰ってきたのなら掃除を頼みたい」

「は、はい」

グレイはトテトテと、先生の方にかけていく。

「じゃあね、先生」

今度こそ、俺は部屋を出た。

ライネスが 久方ぶりにため息をついた。

「珍しいな」

「いやなに、なかなか面倒ごとだね。アーク、今度の週末は空けておきたまえ」
「強制かよ・・・一応空いてるけどさ」

下僕に人権はないということか。

「じゃあ週末までにきちんとした洋服を用意することだ」

「どういう意味だ」

「社交界への招待状が来ていてね」

「同伴しろってことか？・・・まあいいけど」

「まー、君だけじゃ不安だからトリムも連れて行くが、それでもまだ不安要素が残るね」

「一体どんな怪物がいる社交界なんだよ・・・」

魔術師の社交界は確かに一筋縄ではないものばかりだ。しかし、俺とトリムマウがいて、不安要素が残る社交界ってなんだよ。誰からの誘いなんだろうか？

「なに、トランベリオ派からのお誘いさ。普通なら遠慮するところだが家に融資してくれるノリーツチ卿を介しているとあってはさすがに無視できないだろう？」

「トランベリオ派からか。確かに無視できないな」

納得がいった。そして、察した。

「黄金姫、白銀姫のお披露目か？」

「正解だ」

「なるほどな……」

「というわけで、今から我が兄の所に行つてグレイを借りてこようと思つてね。ついでに兄で遊んでこようかと思つてるんだ。君も来るかい？」

「遠慮しておくよ」

最近深くなつている皺をもつと深くしている先生の顔が思い浮かんだ。哀れ……先生……せめて気を付けて、あなたの胃を破壊する義妹悪魔がそちらに行くぞ。

翌朝俺たちはロンドンから電車に乗っていた。無事、先生の説得はできたようで、グレイの了承取れた。

待ち合わせはホームでと話していたのだけれども、まだ電車に慣れていなかったらしく、改札あたりでマゴについているグレイを発見した。流石に切符はわかるが、最近採用されたばかりの非接触型 IC カードの改札機を見つけてしまってフリーズしていたらしい。

グレイの荷物はいつもと変わらなかった。まあこちらも、小さめのリュックサックとスーツケース一つを転がしているきりだ。トリムマウも街中で見せびらかせる代物ではないので、こちらに収納してある。というか、当たり前のようにライネスの荷物も持たされているこの状況に俺的には異議申し立てをしたい……。

「付き合わせてしまつてすまないね」

ライネスが少し申し訳なげにグレイに話しかけると

「い、いえ」

と遠慮深げにグレイは一礼した。四人がけのコンパートメント席で、奥の席にライネス。その正面にグレイ、ライネスの隣に俺という順番で座った。ライネスもグレイも話したがっちはいるが、壊滅的に一般のコミュニケーション能力がないので、視線を右へ左へ動かして話題の切り出し方に迷っている。

仕方がないので少し助け舟を出すことにする。

「まずは軽い食事と行かないか」

そう言つて用意した木箱をスウィツケースから取り出す。シユルシユルと赤いリボン
を解き蓋を開くとかぐわしいカカオの香りが鼻腔をくすぐる。

そこに並んでいたのは様々な花の形を模したチョコレートだ。表面には丁寧な砂糖
漬けされた本物の花びらも飾り付けられていて、まず見た目から非常に楽しい。

手元のチョコレートをつまみぱくりと口に入れる。舌の上で溶けていく甘みとかす
かな苦味。思わず、顔が綻ぶ。先ほどの花びらの甘みが重複的に重なつてついつい2個
3個と手が伸びてしまう。

ロンドンでライネスが鼻唄にしているシヨコラティエの作品で、普段はチョコレート
ドリンクを堪能させてもらっているのだが、こうした詰め合わせも侮れないつというの
がライネスの弁。

素晴らしきスイーツの味に浸っているとくすくすとグレイが笑い出した。

「ご、ごめんなさい。ただ、あまりにも二人が同じ反応をするので」

どうやら、チョコレートを食べているとき同じ反応をしているように見えたらしい。
実際、同じ反応だったかは定かではないが……。

「そうか？気のせいだと思うぞ」

一応否定しようと思えば、ライネスとハモツた。

「・・・それにしても今月はビターにまとまってるな」

話題をそらすためか、ライネスが切り出した。

「食べ過ぎて太らないようにしろよ。ライネス」

少し、焦っていたからか、普段絶対に言わないであろうことを口に出した。失言だったのと気付いた時には時すでに遅し。足を思い切り踏まれ、強化した拳で殴り飛ばされていた。意識が飛ぶ直前で踏みとどまり、ここに止まっていたら殺されそうだなと思いき、そそくさとコンパートメントから抜け出した。

私に凄まじい暴言を吐いたあのバカ下僕のことにはさておき、ひとまず目の前のグレイに視線を移す。

「ひとつどうだい？」

「あ、ありがとうございます」

礼を言われたので、適当に一つ渡す。あまりお菓子の習慣はないものか、バラの形で

砂糖漬けの花びらの添えられたチョコレートを、しばらく手のひらに置いたまま戸惑っていたが、思い切って口へ放り込むと目を丸くしたまま数秒程硬直した。

「美味しいです」

「フフフ、気に入ったなら他のものどうぞ」

小動物みたいな反応に嗜虐心も満足して、スートケースへもう一度手を入れる。

「じゃんー！」

と今度はボトルを取り出す。

「お酒・・・ですか？」

不思議そうに、小首をかしげるグレイ。

「フフフ、このチョコレートセットはシャンパンがセットなのが売りだね。もつとも今回はアルコール分を蒸留させたノンアルコールワインなんだが、ちよつとばかりいかなかな？」

なお、我が英国では父か母の許可があれば自宅に限り5歳から飲酒OKである。なのでノンアルコールとか言っても今更感があふれているのだがこれも TPO だった。現にアークは 私の目を盗んで、結構いい値のするワインを飲んでいゝ。少し、腹が立ったので中身を水に変えておいたが・・・。それはさておき携帯用のグラスも二つ取り出し、グレイと自分の文を注いで、渡したチョコを一口。舌の上に濃厚な甘さが残つ

ているうちにワインも一口。とろりと広がったまみが清涼なブドウの風味と渾然一体となつて喉元まで広がっていくのを堪能する。

「ん〜、やはり素晴らしい味だ」

「甘いもの好きなんですわね」

「ああ、私は茶会が好きでね」

「アークさんも好きだというのを聞いたことがあります」

「確かに、アークは私以上にこういういったものが好きだな。時たま、彼が買ってくるスイーツはどれも外れたことがない」

何気に、アークとの茶会は私の中でもかなり楽しみなイベントだ。

「仲がいいんですね」

「そう見えるかい？」

「はい・・・どちらも、お互いのことを大切にしている感じがします」

「・・・まあね。せつかくの玩具が壊れてはことだしね！」

「玩具って・・・」

「さて、グレイ。もう一つチョコはどうかかな？」

「こうしてなおやからティータイムは過ぎていった

冠位の魔術師

ロンドンからウエストコースト本線に乗っておおよそ3時間半。

途中のオクセンホルム駅で乗り換えてしばらくすると ウィンダムミアへ到着する。

イングランド有数のリゾート地として知られる土地だった。ピーターラビットの故郷といえは分かるものもいるだろうか。作者であるビアトリクスポターが愛し山と湖に囲まれた景色とその牧草地に住まうさぎたちを切り取った絵本は今でも世界中で読み継がれている。 駅から降りてすぐのところには1台の馬車が待っており私たちの姿を認めると、御者と思しき人物が帽子を取って一礼した。

「お待ちしておりました。ライネス・エルメロイ・アーチゾルデ様ですね」
と御者は頭を下げる。

「バイロンより申し付かっておりますどうぞお乗り下さい」
「では遠慮なく」

キヨロキヨロとグレイがこちらを見つめていたが、鷹揚に私は頷いた。ここで遠慮しても何の意味もない。アークは少し慣れていよう、スーツケース片手にさっさと乗り込んで、後ろのグレイにも続くように促した。鞭の一当てで鳴き声とともに馬が歩き

出した。平地はもちろんかなり険しい山道も馬車は優美に進んでいった。

動物に聞かせているのにほとんど上下動を感じないのは、何らかの魔術によるものだろう。

私がスーツケースにかけているような重量操作の魔術かはたまた車体にちよつとした浮遊魔術をかけているのかもしれない。

「どうやら見えてきたね」

と窓の方を私は顎でしゃくつた。二つの塔が湖畔に佇んでいた。現代の基準で言えばさほど巨大な建物ではない。せいぜい、4階建てビル程度のもだろう。ただ陽に傾いてそそり立った形がどちらの頭も酷似していた。

「二つの塔を指して双貌塔と呼んでいるらしい。あるいはこの土地を管理している家の名を出して、双貌塔イゼルマとも」

「双貌塔イゼルマ……」

鸚鵡返しにグレイが呟いた。

「東側の陽の塔西側の月の塔と申します」

聞いていたのかどうか御者の声が馬車の内部に響いた。陽の塔、月の塔。つまりは太陽と月ということだろう。最も私個人としては獲物を待ち構えている蟻地獄のようなイメージの方が強かったのだが、工房は当然のこととして魔術師の領地はまずその家

に最適化されている。

詰まるころは要塞のようなもので、一握りの砂ひと呼吸の空気すらもが自分たちの敵にいつももあるかもしれないのだ。ただならぬ緊張感に私の唇はついほころんでしまっていた。

今回は月の塔のすぐそばで馬車が停まった。

「こちらでございませす。ではお楽しみくださいませ」

つと御者は首を垂れる。

私達が降りて少しするとその御者と馬車がとろりと溶けた。まるでおとぎ話みたいに残っているのは小さなおもちゃの兵隊と馬車が一つずつであった。

「流石は創造科の正当な分家、この手の最高はお手のものか・・・」

思わず私が唸りをあげると

「お褒めに預かって光栄です」

低いバリトンがかかった。

「いらつしやいませエルメロイの姫」

身をかがめたのは口ひげを蓄えた40歳の親子であった。ブラウンの髪で朱色のスーツを纏い足が不自由なのか片手に杖をついている。

「バイロン・バリユエレータ・イゼルマと申します。遠路はるばるお越し頂き感謝いたし

ます。」「イゼルマの当主であられたか、これは挨拶が遅れました」

出来る限り丁寧に一礼する。こちらも12の君主に名を連ねた当主とは言え今は我が兄にその席を譲っている。元々アーチゾルテが末端の末端なのを考えれば、家の格だけで言えば六分四分で向こうが上といったところだろう。微笑と共に頷きバイロン卿は片手で塔の入り口を指し示した。

「お入りください。すでに宴は始まっておりますゆえ」

「四面楚歌だな」

「ああ、まったくだ」

「6割方はトランベリオで、1割がバルトメロイ、残りがメルトアステアといったところだな」

「派閥の名前ですか？」

「ああ、民主主義の代表トランベリオに、貴族主義の代表バルトメロイ、どうでもいいから研究させる的な考えを持っているメルトアステア」

グレイの質問になるべく簡単に俺は答えた。

ちなみに我らエルメロイが所属しているのもバルトメロイを筆頭とした貴族主義派閥である。敵対しているのはトランベリオを中心にバリューヘータを含む民主主義派閥。

ざつくりと片付けると、時計塔を運営するのはより優れた貴族の血統に任せるべきか、血統はイマイチでももつと多くの才能ある若者から募るべきかということだ。

最も結局は魔術師のことだから、貴族だの民主主義だの言っても大きな違いがあるわけではない。魔術師であるというふるいにかけられたものの中からさらにふるいにかけるのを良しとするかどうかという話だけだ。

「なんとなくわかりましたエルメロイは貴族主義派なんですね？」

「一応ね。・・・だけどまあここ近年ややこしくなってきたのさ」

俺が答える前にライネスが口を挟んだ。エルメロイが貴族主義なのは先代のロードエルメロイが亡くなる前は指折りの大貴族だったことに起因しているのだ。だが、現在大変残念なことにそれほどの権威の財力も今のエルメロイには欠片も残ってはいない。

むしろ新世代を率いてエルメロイ教室を開いている現在、実質的には民主主義に近かったりする。加えてエルメロイ派閥はともかく、先生自体の振る舞いは保身にも思っ

ておらず、貴族主義社会であるバルトメロイからすれば、「お前うちの派閥で飯食ってるんじゃないの？何考えてんの？」な状況というわけだ。もちもちろんうっかりミスをするとかマストダイな展開だ。先生なら、クソゲーだーと叫んで、コントローラーをぶん投じていることだろう。三大貴族でも最大とされるバルトメロイの権力は化け物じみており、まさに闇そのものだ。

面倒な貴族の解説は、ライネスに任せて周りを見回してみる。

「ほう、君は薄い血統で魔術の誇り高い歴史に何かが残せるなると妄想を抱いているのか!？」

「あなた方こそ、ここまで魔術が衰退した今も自分達だけで魔術を維持できると思っているのか?いつになったらそれが取り返せぬ夢だと自覚できるのか!？」

思った通り面白い展開になっている。老獪の魔術師ならばもう少し表沙汰にしない形でやるのだろうか、若輩者はこらえていられないらしい。まあ酒が入っているのだから尚更だろう。

今日の社交界の集まり方の年齢層は結構若い方だ。

「今の時計塔が新世代なしに成り立つとでも?」

「あはははは、元々時計塔は貴族のために作られたものだ!!そのおこぼれを与えられたからといって何事かを成したつもりだったのかね?」

争っている二人を中心にそれぞれの派閥がゆるりと緊張をみなぎらせた。エルメロイ教室のバカどもみたいに、すぐさま魔術戦になることはないが険悪な空気はすぐさま会場に伝播していく。

思わず口角が上がる。このまま、魔術戦が始まり互いに潰しあってくれたら、最高に愉悦な展開だ。自分の都合を、正義だとか高尚な思想だとかで武装させ、あたかも自分は正しいんだと・・・だから、他人を押しつけても自分は悪くないんだと、そんな考え丸出しのバカが、いがみ合うのはいつ見ても滑稽だ。

まあ、そんなことは絶対にならないのだがこのまま、二人の会話がヒートアップしていくのなら、何かしら起こるのは想像に難くない・・・というか自明だろう。

だが、そうはならなかった。酔っぱらったふりをした男が、二人の間に乱入して、大の字に倒れて、騒ぎ出したのだ。これには、毒気を抜かれたのか互いにため息をつき、魔術師たちは離れていった。まるで、世界の汚物から離れていくような感じだ。

汚れ役を買ってでるとは、変わり者だな。

ライネスが面白がって、彼に近づいた。

話を聞いてみると、彼は伝承科のマイオと言うらしい。一瞬で、酔っぱらえる薬で

酔っぱらい、いさかいを止めたらしい。

「その魔術礼装、ひよつとしてエルメロイの？」

「おや。こ存じなので？」

「は、はい！」

マイオは何度も頷いた。

「その名も高きロードエルメロイが完成させた月齡髓液!!!流体操作の機能美がまさかこんなところで出会えるなんて!!!すみません少しだけ触らせてもらっても構わないですか!？」

「いやそれは構わないが……」

言うが早いかマイオは早くも水銀メイドの体に指をすべらせ、おもちゃコーナーを前にした子供みたいな声を上げ始めた。

「あああああああ、すごい!!!衰退した人体構造の概念じゃなくて、あくまで流体操作と人格やの結果最もふさわしい形態を取らせているだなんてツ！器が中身にそうなのは、違和感だけど魔術として正しい。魔力自体の最低限で維持できるように全体の循環を促す仕組みになっている。これあなたの仕事ですか？」

「兄のアドバイスは受けたが……」

若干、勢いに押されてタジタジな、ライネスが面白く、声を上げない程度に抑えて笑うと、思いつきり足を踏まれた。・・・理不尽だ。

「兄？じゃあなたは・・・」

言いかけたところで別の声が降り落ちた。

「マイオ」

優しい声だった。

「研究熱心なのはいいけれど、他の家の魔術礼装に触るときはもう少し気をつけた方がいいわ。殺されても文句言えない」

「すみませんミス・アオザキ」

「初めまして、蒼崎橙子と言います」

「あ、蒼崎 橙子・・・」

ライネスが俺の横で、かすれた声を上げる。

女をくすんだ赤色の髪をしていた。それこそ東洋人にも珍しい色だったか染めたのではないだろうと思った。ライネスとは違うが、この女の本質によっているような色だ。

ちらりとライネスを横目で見てみると啞然とし固まっていた。それもそうだろう、この女こそ今回の社交界で、最も警戒しなければいけない人物である『冠位』の魔術師な

の
だ
か。

本来なら緊張しなければいけない場面だが、ライネスの弱々しく掠れた声を聞いて、少しゾクゾクしてしまった。ライネスは普段は絶対にしないだろう、表情をしており、なかなかレアだ。

「初めまして、ミス・アオザキ。自分は、アークライト・ファムルソーデといいます。お会いできて光栄です」

ライネスに冷静な思考が戻ってくるまで、俺が時間を稼ぐことにした。

「ツ……ご丁寧にも……噂には聞いていましたが、珍しいものを持つてるのです
ね」

一瞬、驚きに目を見開いたようだがその後、柔らかく微笑んで、彼女はささやいた。少し驚いたようだが、驚きたいのはこつちだ……。一瞬で、見破られなんて……。ビリビリと伝わる圧倒的な存在感。柔らかな雰囲気は外側だけ、その内側にあるものは……。あまり触れないほうがいいだろう。

これが、冠位の魔術師か。

それに様々な魔術を自分に重ねがけしているのだろうか……。彼女の周りには事象の波が、幾重にも重なって渦巻いている。

あと、背後にも蝶の羽根のようにも、とりどりの花のようにも見える何かが見える。

経験則から言うなら、魔術ではなく、刻印そのもののようなのだ。

「様々なもので、自分を守っていらつしやるのですね。いえ、そもそもここにいらつしるあなたは、本当の意味であたなのでしょうか？」

「・・・もはや、それは魔眼とは、呼べないのでは？ 実に興味深いですわ・・・どうでしょう？ エルメロイではなく、私に仕えてはみませんか？ 何か魔術的な制約があるのだとしても、私なら如何にかできますよ」

「なあッ!？」

俺よりも早く、ライネスが驚愕をあらわにしていた。

「お言葉ですが、ミス・アオザキ。このような場で、話す話題ではないかと」

「・・・・・・・・・・」

ライネスがすごい目でにらんでくる。それはもう、射殺さんばかりに。

どうやってこの空気を変えようかと、考えていると広間から歓声が聞こえてきた。

「黄金姫のご登場だ」

嵐の前

「どうぞディアドラ様」

「どうぞエステラ様」

「お入りください」

最後二人のセリフは同時にいった。バルコニーの陰からゆつくりと紫のドレスが分離していた。次の瞬間には、時間が引きちぎれた。

ありとあらゆる感覚がこの刹那で失われた。

いや■のなんていう陳腐な語彙ごと弾け飛んだのだ。こちらを見下ろす瞳は、宝石のごとく、理想的な鼻梁は天井の彫刻家が魂を落として削り上げたに違いないと思わせるほど。

閉ざされた楽園の花弁を思わせる唇には決して失われない青春の輝きが宿っていた。そんなひとつずつの表現が、馬鹿らしくなるほどにその女はその女であるだけで美しかった。全ての形容詞を失った果ての何か。

仮にも魔術師たるものおいそれと口にしてはならぬ■としか表現できない結末の地点。

「黄金姫を襲名いたしましたディアドラ・バリユエレータ・イゼルマと申します」

何人かの魔術師が手に持ったグラスを取り落とし自らの靴にブドウ色のシミを作ったことにさえ気づかなかった。完全に呼吸を止めてしまい酸欠に落ちいるまで立ち尽くすものもいれば、その場に跪き滂沱と涙する者さえいた。

これが魔術による精神攻撃ならば誰も歯牙にかけないかっただろう。ここに集まったものはそれなり以上の魔術師であり魔術師たるものまず、自分の精神を磨くことこそが最初に教えられる事項だったからだ。ただただ純粹なる■であったからこそ、彼らに培ってきた精神防衛の術式は紙のように引きちぎられた

本来、意識しても魔眼を使つてさえいれば、俺自身も影響を受けることはなかったはずだが、魔眼を使う気すら根こそぎ持つていかれるほどの何かがそこにはあった。はっきり言つて自分の意識が断絶していたことに気付くのが遅れた。

「白銀姫を襲名いたしましたエステラ・バリユエレータ・イゼルマです」

周囲を見を回せばほとんどのは未だ意識を回復していなかった。主の到来を目視した信者ならば同じような反応になるかもしれない。何人かが目を押さえているのはこの景色を最後に眼球を潰してしまいたいという衝動に駆られたからだろう

その衝動を抑え込めたのももう一度同じ日を見られるのではないかという浅ましい欲望。

「なるほど」

隣から上がった声に目を向けると、蒼崎橙子がささやいた。

「あれが黄金姫か……噂には聞いていたがよもやそこまで至るとはイゼルマの歴史もなかなか賞賛せざるを得ないな」

先ほどとは変化した口ぶり……

「性格の切り替えか」

「ご名答。少し性格をね……」

外していたメガネをかけ直して橙子が会釈する。その時には先ほどの雰囲気に戻っていた。乾いた拍手が会場にこだました。

「お見事！」

おそらく70は超えているであろう見た目、狼の如く気高い銀髪。緑の洒落たドレスに身を包みびつしりと背筋を正してその老女が心地よい拍手を送った。それは自失していた魔術師達さえ立ち直らせる清涼なる響きだった。その魔術師ロードバリユエレータを視認した瞬間、俺はライネスに囁きかけた。

「少し席を外す。後は グレイとトリマウで何とかしてくれ」

そう言う俺に、ライネスは渋々といった表情で頷いた。

結局、ライネスと合流したのは社交界が終わってからだった。

多くの魔術師達はそのも帰路に就き、財政的にも明日の電車を待つ必要のある俺たちは、向かいの塔の東に部屋を借りていた。どうやら月の塔が家の陽の塔が客人の場所と言う割り振りらしい。

さすがに上質のベッドであり横たわるだけで無重力空間な気分させられる。俺とライネスはため息を吐きそつと瞼に触れる。

ライネスの眼球はそれはもう暑くなっていることだろう。これだけ多くの魔術師がいたのだ。常にチャンネルを合わせていた眼球が軽い熱暴走起こしているはずだ。幸い、俺はこの魔眼を使うことがなかったので、悪化はしていない。

「いやー参ったよ。ロードバリユエータ。冠位の蒼崎橙子とは・・・考えるべきことが山積みでどこから整理したのかさっぱりさ」

ぼやくライネスにグレイが声をかけた。

「ですけど襲われるようなことはなくて良かったです」

グレイはベッドではなくソファアーに座っている。長いこと気を張っていたせいか、まだ落ち着かないようでそわそわしている。

組み合わされた指がちまちま動いているのが、まるであやとりのようだ。

「まあちよつかいを掛けそうなやつも、今回のお披露目で毒気を抜かれたんだろう。あ

そこまで行けば兵器だな！」

「・・・どうしてあんなに美しい人を作ったんでしょう？」

「兄とも話していたが美しさが魔術の領域だからさ」

目薬を差しながらライネスが答えた。

「美しさがですか・・・」

「そうさ兄は、数学的な調和が魔法円や工房に必要なだからとか話していたが、確かイゼルマと言うかバリユエレータはもつと根幹的な部分で美しさを評価しているんだよ」

「根源の渦に至るためわけか」

「正解！バリユエレータはそこに至るために■という道を選んだ」

「元々美的感覚とは人間にとつて生き延びるための機能だった。そう先生も言っていたな・・・毒を避けるために嗅覚味覚を発達し、危険を避けるために視覚聴覚は鍛えられてきた・・・だけどころかこういう五感とは別に人間は思考を確立する以前から、快樂をもたらす感覚として美は存在していた」

フランスはラスコー洞窟に描かれた壁画、レンドルフ遺跡で発掘された旧石器時代の画像たち。

原始美術とも言われるこれらの作品群は人類と美術が切り離せない関係にあることを明示している。

「そうだ。グレイ。少しの間だけ、アークと二人にしてくれないかな？ちよつと話しておきたいことがあるんだ」

「あ、はい。分かりました・・・」

グレイは困惑した様子だったか指示通り、部屋を一旦出て行った。

「それで話とはなんだ？ライネス」

「その前に、もつと近くに来たまえ。というか来い」

俺は最近疲労のせいもあってか、思考を停止してベットに腰掛ける。それがいけなかった。思いっきり引つ張られて、ベットに押し倒される。その状態のまま、ライネスが馬乗りの状態で乗ってくる。

「アーク、君は私のものだ」

「・・・だから何だよ？」

「さっきのあれはどういうつもりなのかな？アーク」

「何のことだ？」

「決まっているだろ！蒼崎橙子に勧誘されたときの返答さ!!」

その蒼瞳を俺に向け、にらみつけてくる。

「・・・そう声を荒げるなよ、ライネス。あの場で真つ向から、否定するよりあの返答の方が穏便に済ませられると考えただけだ。それに、分かっているだろ？ギアススクロー

ルは絶対だ。俺は、ライネスを裏切らない」

「・・・蒼崎橙子は、それを可能にするといった。実際、冠位の魔術師なら不可能とはい切れない」

「ハハ、ライネス。それは、お前を捨てて、俺が裏切り行為をするって言いたいのか？ふざけんなよ」

自分でも驚くくらい、低い声が出た。ライネスが目をわずかに見開き、驚愕する。

俺は、無理やり態勢を変えライネスを押し倒した。

「よりにもよって、俺が裏切るだど？誰がそんな薄汚い真似するかッ！俺はあいつらとは違う!!!」

「・・・そうかい、それを聞いて安心したよ・・・本当にね。だが、この私を困らせたのは事実だ。何か見える形で謝罪してもらわなければ割に合わない」

「何がお望みで？」

「そうだな・・・君の遺伝子を私に差し出すとか？」

「つまり子作りしろと？」

「ああ、あーでも、これでは君に得がありすぎるな。何せ、こんな美少女と一夜を共にできるのだから」

・・・あきれた女だ。何年共に生活してきたと思っっているのだろうか？情は湧きこそすれ、それは愛情ではない。

「ハア、もうグレイを呼び戻したらどうだ？外で待たせ続けるのは悪い」

「そうだね、今すぐ戻ってきてもらおうか？」

ニヤリと悪魔の笑みを浮かべたライネスを俺はどうかして止めるべきだった。しかし、時すでに遅しつというか、勢いに任せて何でこんな体勢に持ち込んだのだろうか。俺は盛大に後悔した。

「グレイ、今すぐ来てくれ」

同じベットで服の乱れた男女が片方を押し倒している。この状況を見て、どういった反応をグレイにされたのかは、ご想像にお任せする。ただ・・・めつつつちやくちや、誤解を解いてまじめな話を始めるのが大変だった。